

小の研究会に参加してきました。

久々にたいへん育った子どもたちを見てきました。

小の6年生の授業です。

中身は、老人ホームのお年寄りふれあったあとのシンポジウムでした。

柱は3つ。

お年寄りの気持ちについて話し合おう。

お年寄りの気持ちを考えて、自分たちにできることを考えよう。

お年寄りと接するとき、どんな気持ちで接したらよいだろうか。

この3つについて、話し合われました。

シンポの流れは次のようになっていました。

教師によって指名された第一発言者が、テーマについて話す。

の発言者に対して意見のある児童は、指名なしで、立って発言する。

さらに意見のある児童は、立って発言する。

教師が引き取り、次のテーマへと転換する。

研究協議では、子どもの発言の深さと心情の豊かさに意見が集中しましたが、それよりもこの話し合いのシステムはどうなっていて、それをどう指導したのかに私は興味があります。

少々分析してみたいと思います。

まず、話し合い活動を指導する際の前提です。

話し合い活動とは、「作文指導」と「聞き方指導」の組み合わせで成り立つ

話し合い活動とは、文字通り「話すこと」を指導すると理解していると、永久に話し合い活動はできないのだと思います。

さて、です。

ここで、教師は第1発言者を指名しています。

そして、指名された児童はテーマに関して、2分に及ぶような長い発言をしています。

その際、児童はファイルを見て発言をしていました。

この場面での発言はアドリブではないということがわかります。

事前に十分時間をとり、児童にはあらかじめテーマに関する作文をさせておく訳です。そして、教師はそ

れを見て指導したはずです。

つまり、発言指導とは要するに作文指導なのです。それがわからない教師は、その場でいきなり発言させたりするわけです。子どもがかわいそうですね。

話し合い活動をするときには、事前にたっぷりとノートに意見を書かせておいて、それを教師が見て、「すごい意見だなあ」とほめてあげて、その上で「ノートを読んだっていいんだからね」というのです。それだから子どもたちは安心して、発表できるのです。

ただ一人、一番後ろの女の子だけはなにも見ないで発言していました。この子は、おそらく別格でしょう。

そして、この第一発言者は、必ず自分の発表の最後に「皆さんどうですか？」という言葉を使います。

これが、次の発表者への合図になっています。

この言葉によって、話したい子がざざっと複数立ちます。

第2発言者以降には、ルールが3つ存在していました。

たくさんの人が立ったら、目で合図して自然と譲り合うこと（これを自然にやるだけで半年かかります。やった教師でなければわかりません。ついでに言うと、いきなり発言させているのではなくて、初めは「指名なし音読」次に「指名なし発言」の指導をしたはずです。）

前の人の発言を「      さんと同じように」「      さんとは少し違って」などと言って受ける。

最後の一人は、また「皆さんはどう思いますか？」と投げかける。

ここでの、発言も事前に書いた作文の内容が基調になって、されています。

しかし、即時的な発言もあつたはずです。

つまり、その場で思いついたような発言です。

そのような即時的な発言は、どのように指導したらよいのか。

即時的な場面を普段からつくっておくのです。

例えば、音読のテストをさせるときにこんなことをやります。

『いいかい、いま山田くんが読むからね。みんなは読んでいる間にね、山田くんのよかったところを一つは言えるように準備しておくんだよ』

そして、山田くんが読み終わると同時に、『男の子起立！山田くんのよかったところを言ったら座りなさい』

こうしたことを、ありとあらゆる場面でやるわけです。

やがて、誰かが発言したあとに、『発言したい人立って行ってごらん』と言うだけで子どもは発言するようになります。

これが、即時的な発言をさせる指導です。

しかし、これは実は聞き方指導です。つまり、「聞くときには意見を持ちながら聞くんだよ」という指導なのです。

もう一度言います。

話し合い活動は、「作文指導」と「聞き方指導」なのです。

これらのことは、一朝一夕にはできないのです。

ただ、担任教師が意識して、あらゆる機会にやり続ければ半年でできるようになります。

